

原 著

投影樹木画法におけるトラウマ指標の統合化と それを巡る2, 3の問題

大 辻 隆 夫*

Integration of Trauma Indicators and Some Problems
in the Projective Tree Drawing Technique

SUMMARY

The purpose of this paper is to make a list of Trauma Check List (TCL) in the projective tree drawing technique and elucidate some problems on the technique in the working process of making a TCL. As a result, three problems were found as follows and considered.

1. The disintegration of classification and interpretation on roots, ground lines and their relations.
2. Tree drawing inclined toward middle is not only a tree drawn at middle but also a tiny tree.
3. Relative Age Analysis to traumatic experience time has two techniques; one is Buck's technique measured from groundline to top, and the other is Koch's technique from root to top.

問 題

投影樹木画法 (the projective tree drawing technique) は、描画者自身の伝記的状況 (biographical situations), つまり人生における過去の重大な経験にまつわる葛藤やトラウマを反映するとされており、現在は児童虐待の早期発見の道具の1つとして危機査定 (crisis assessment) のための指標化がおこなわれている (Cantlay, 1996, Hammer, 1997, Jolles, 1971, Ogdon, 1977, Oster & Gould, 1987, Oster & Montgomery, 1996, Wohl & Kaufman, 1985)。

たとえば, Cantlay (1996) は多くの研究者がこれまで事例研究において指摘してきたトラウマ指標を一覧表に体系化しているが, トラウマ

指標一覧表については, すでに Oster ら (1987, 1996) も簡便なものを発表している。しかし, それらの一覧表には整合性に欠ける指標や十分に検討されていない指標があるため, 投影樹木画法を信頼性と妥当性のある実用性の高い臨床査定道具とするためには, 今後これらの指標を統合化していくことが必要であると思われる。

つまり, 現在の投影樹木画法研究における重要な課題のひとつは, 児童虐待発見と査定のためのツールとして, 虐待によるトラウマ指標の確定とその統合化及び適用にあると考えられる。

さて, 本研究の目的は, まず第一にトラウマ指標の統合化をおこなうことであり, 第二はその統合化作業を通して, トラウマ指標にまつわる問題点を明らかにすることにある。

方 法

* 京都女子大学家政学部講師 (児童教育学)
Takao Otsuji

トラウマ指標の統合化については, 現在最も

体系化されていると思われる Cantlay (1996) の一覧表を中心にして、そこにおける分類と構成を参考にし、Oster & Gould (1987), Oster & Montgomery (1996) の指標、さらに Hammer (1997), Jolles (1971), Ogdon (1977) 及び Wohl & Kaufman (1985) らが指摘する指標をすべて織り込み、再構成した。

トラウマ指標に関する問題点については、統合化作業過程において、明らかになった論点について考察し、今後の問題提起をおこなう。

投影樹木画法におけるトラウマチェックリスト (Trauma Check List: TCL) の統合化

本トラウマチェックリストは、I 全体: No. 1-11, II タイプ: No. 12-15, III 配置: No. 16-20, IV 枝: No. 21-26, V 樹冠/葉: No. 27-33, VI 幹: No. 34-42, VII 根: No. 43-47 の計 7 領域、47 指標で再構成をおこなった。その結果を、下記に表 1: 投影樹木画法におけるトラウマチェックリスト (TCL) として示した。

表 1 投影樹木画法におけるトラウマチェックリスト (TCL)

	No	指 標	解 釈
I 全 体	1	大きすぎる木	攻撃的傾向, 行動の誇示 想念もしくは神経質
	2	小さな木	劣等感, 無価値感
	3	弱い線	不適応感, 優柔不断感
	4	2 本線のみの幹と円冠で構成された木	衝動性, 気が変わりやすい
	5	過度に濃い陰影もしくは強化された陰影	敵対的防衛もしくは攻撃的行動
	6	細かい破線	顕在的不安
	7	8歳以降に見られる果樹, 多すぎる果実	自己を消耗させる依存要求
	8	描画スタイルの相違: 二次元の幹と一次元の枝	後年のトラウマによって阻害された早期の良好な発達
	9	細部への過剰な描画	危険な世界に対する知覚, 自我統制の保持にまつわる葛藤
	10	木と認識できない木	性的虐待を受けた子どもによって描かれることが多い
	11	11歳以降に見られる用紙の底辺縁への配置	未成熟の兆候
II タ イ プ	12	果樹	8 歳以降の果樹の描画は未成熟を示唆 (ただし 5 歳から 7 歳では正常) りんごの木: 依存要求
	13	クリスマス・ツリー	依存要求
	14	枯れ木	深い劣等感や自殺行動の可能性を伴ううつ状態
	15	ヤシの木	性的関連性
III 配 置	16	用紙の右側への偏り	男性的支配性, 父性的支配性: 統制された傾向, 満足の追 及, 不安定感
	17	用紙の左側への偏り	女性的支配性, 母性的支配性: 衝動性, 情動性, 自己中心 的傾向, 不安定感
	18	用紙の上方への偏り	未来: 不安定感
	19	用紙の中央への偏り	現在: 不安定感, 頑固
	20	用紙の下方への偏り	過去: 不安定感
IV 枝	21	葉のない枝, 一次元の枝及び扇形の枝	衝動性, 緩慢, 不安定
	22	下向きの枝	圧力に対処する能力が失われる可能性
	23	枯れ枝	トラウマ体験, 対人関係から満足を得る能力の喪失
	24	折れた枝	事故, 疾病, 強姦などのトラウマと関係 性的関連性
	25	過剰に大きな枝構造	他者への依存要求と関連
	26	木の中央に向かう枝, もしくは内側に曲がった枝	自立感や他者から引きこもる可能性
V 樹 冠 ／ 葉	27	閉じた樹冠	包囲 外部の力が侵入できない 自己表出を禁止する

	28	樹冠と幹の間の空間	感情と精神過程が分離 セルフケアができない
	29	幹に覆いかぶさる樹冠	自己内部の空虚感 他人に駆り立てられる
	30	なぐり描きの樹冠	衝動性, 不安 混乱した思考と価値構造
	31	頂上の切断, 扁平な頂上部の枝構造	社会的孤立 苦痛を伴う想念生活を拒否ないしは否定
	32	強調しすぎの樹冠	情動の禁止 分析的
	33	円環状の樹冠	衝動的, 気が変わりやすい
VI 幹	34	濃い陰影	不安
	35	強調しすぎの幹	情動の未成熟
	36	幹の輪郭に見られる荒い描線	不安, 衝動性, 不安定
	37	幹の輪郭に見られる弱い描線	差し迫った自我破滅感
	38	傷, 穴, 節穴	損傷感, 事故, 疾病, 強姦などのトラウマ体験と関連 トラウマの位置: 関係年齢 (現在の年齢を示す樹冠: 樹高と最も関連する時期)
	39	節穴	性的象徴性
		a 内円のある節穴	過去のトラウマと治癒
		b 黒く塗られた節穴	体験にまつわる羞恥
		c 大きな節穴	生殖への強い関心
		d 内部に小動物のいる節穴	出生にまつわるアンビバレンス
		e ダイヤモンド型の節穴もしくは小さな節穴	バグナと関連
		f 小さな単円の節穴	性的関連性
	40	幅広の幹	情動支配的な生活
	41	細い幹	内的な強さや力に対する希薄感
	42	切断された幹	阻止された自我の発達機能
VII 根	43	細い根, 透視される根	希薄な現実感, 弱い理解力
	44	強調しすぎの根	浅い情動反応, 不全感 制約のある推論
	45	地平線がない	ストレスに傷つきやすい
	46	地平線はあるが根がない	抑圧された情動
	47	根も地平線もない	不安定感, 環境関係の欠如

考 察

今回の統合化作業過程の結果(表1)さまざまな問題点が明らかになったが, トラウマ指標に関する主たる問題は,

1. 樹木画の主要な構成要素である根と地平線に関する指標に不統一が見られること
2. 空間配置に関する指標である中央への偏りのある樹木画の根拠となる事例はBuck (1958) の報告事例1例のみで, また彼の紹介した事例の樹木画が印刷上見づらいこと
3. 関係年齢分析法に関する見解に不一致が見

られること

の3点であった。

これら3点について, 下記に考察する。

1. 根と地平線の関係について, Oster らの一覧表では, 地平線がない: ストレスに傷つきやすい, 地平線はあるが, 根がない: 抑圧された情動, と分類解釈されるが, Cantlay の一覧表では根も地平線もない: 抑圧された情動, 環境関係の欠如, と分類解釈されるなど十分に整理されておらず不統一が見られることが判明した。そこでこうした解釈上の混乱を避けるため, 筆者はこれを分類再整理し, 表1にあるようにVII根

No.45地平線がない：ストレスに傷つきやすい，No.46地平線はあるが根がない：抑圧された情動，No.47根も地平線もない：不安定感，環境関係の欠如，と新たに解釈をおこなった。根と地平線の関係は，トラウマ体験の年齢を樹木画から割り出す際に用いられる関係年齢分析法とも関連する重大な問題であるだけに，この統合化により，関係年齢分析法の方法論の選択や是非を考察する上で寄与するものと予想される。

2. 表1のⅢ配置にある，トラウマ指標としての空間配置の偏りに関する記述の内，一般に具体的な臨床像をイメージしにくくさせているのは，中央への偏りのある木である。その理由は中央への偏りのある木の場合に限って，木が小さな木であるという条件が付加されるからである。つまり，中央への偏りのある木というのは，中央に収縮した木のことを言い，空間配置上の偏りがある他の木については中央からのずれだけを問題にすればよいところを，さらに小さな木であることが条件として求められるからである。

次に中央への偏りのある樹木画の臨床例2例を示すことで理解の一助としたい。いずれもカウンセリングの対象例であり，その治療効果の判定のために樹木画を導入したものである。

まずこれまでの唯一例であったBuckのRの事例を紹介する。

Rは，22歳の大学生の男性である。彼の主訴は鬱，同性愛，反社会的行為及び自殺願望である。

図1はRの1枚目の樹木画で，第2回面接時に描かれたものである。本論と関係のあるポイントについてのみTCLによるトラウマチェックをしたところ，「Ⅰ. 全体」についてNo2の指標「小さな木」と，「Ⅲ. 配置」No20「用紙の下方への偏り」が検出された。前者は描画者の「劣等感」及び「無価値感」を表し，後者は「過去の不安定感」を示すと解釈される。

図2はRの2枚目の樹木画で，第18回面接時に描かれたものである。同じくTCLによるトラウマチェックをしたところ，「Ⅰ. 全体」についてNo2の指標「小さな木」と「Ⅲ. 配置」のNo19「用紙の中央への偏り」が検出された。

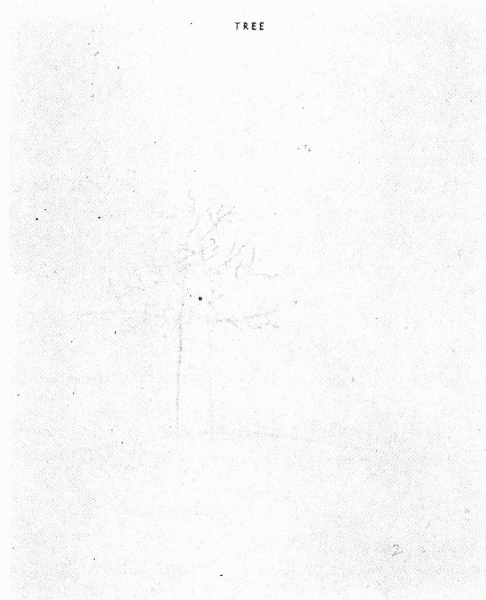


図1 Rの1枚目の樹木画
(第2回面接時)

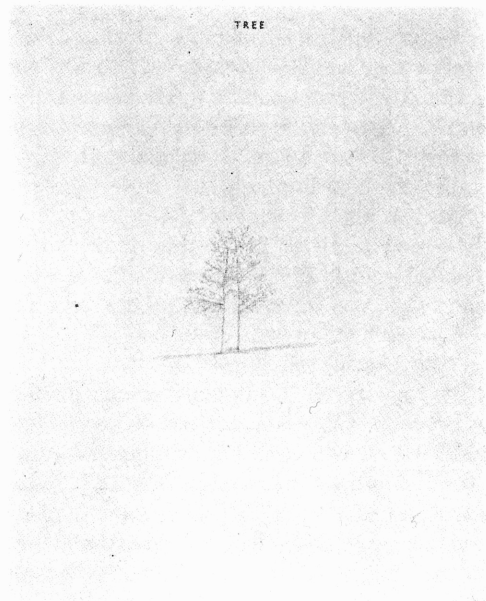


図2 Rの2枚目の樹木画
(第18回面接時)

前者は図1と同じく描画者の「劣等感」や「無価値感」を表すが，後者は「現在の不安定感」と「頑固」の傾向を示すものと解釈される。このことからRの樹木画の変化は「用紙下方への偏り（過去の不安定感）」から「中央への偏り（現在の不安定感）」へ変化したものと分析できる。Buckによれば，Rはこの時点でカウンセリングによる変化として父親への同一視が始まり，

主訴の一部である同性愛が解消されたと述べている。

さらに2例目として筆者がスーパービジョンをおこなったKの事例を紹介する。Kは、13歳の中学1年生女子である。彼女の主訴は、不登校（学校の門から中に入れない）及び学校でも自宅でも幽霊が見えるので怖い、ということである。

図3はKの1枚目の樹木画で第3回面接時に描かれたものである。Rの事例と同じく本論と関係のあるポイントのみをTCLによるチェックをしたところ、「I. 全体」についてNo2の指標「小さな木」と「III. 配置」のNo20「用紙の下方への偏り」が検出された。

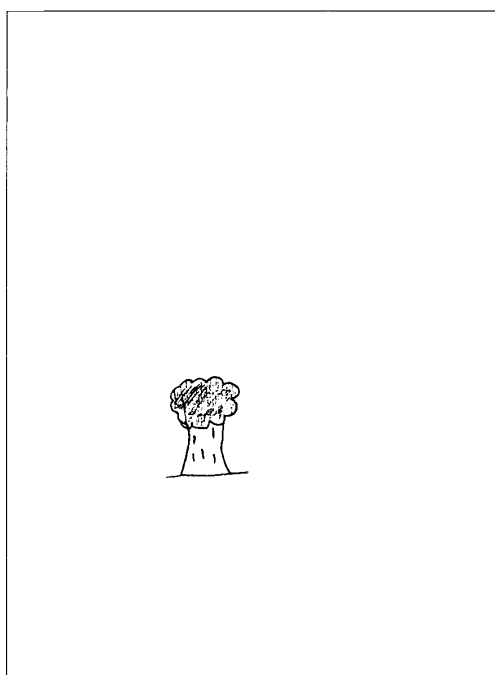


図3 Kの1枚目の樹木画
(第3回面接時)

Rの事例と同じく、前者は描画者の「劣等感」及び「無価値感」を表し、後者は「過去の不安定感」を示すと解釈される。図4は、Kの2枚目の樹木画で第6回面接時に描かれたものである。TCLのチェックによると、「I. 全体」についてNo2の指標「小さな木」と「III. 配置」の「用紙の中央への偏り」が検出された。すでに図1、図2及び図3で解釈したように、前者は「劣等感」「無価値感」を表すが、後者は「現在の不安定感」と解釈される。このことからK

の樹木画の変化は「用紙下方への偏り（過去の不安定感）」から「用紙中央への偏り（現在の不安定感）」への変化を示すものと分析できる。Kのカウンセラーによれば、Kはこの時点で、不登校の状態から別室登校へと行動の変化があったと述べている。

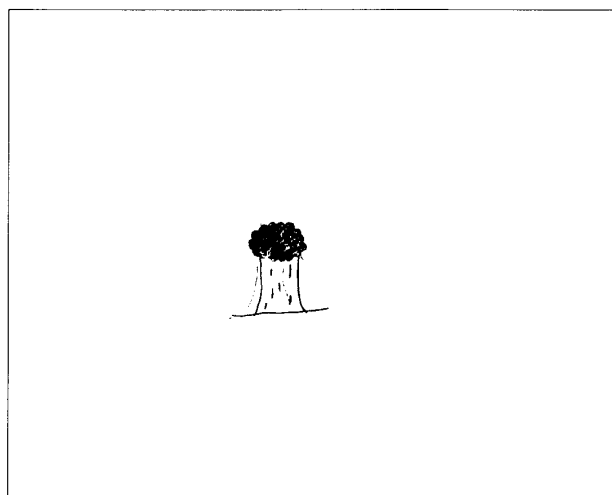


図4 Kの2枚目の樹木画
(第6回面接時)

3. 関係年齢分析法については、トラウマ体験の時期の算出に際して、①地平線から頂上までを測定対象とする分析方法(Buck法)と②根から頂上までを測定対象とする分析方法(Koch法)があるが、筆者は①のBuck法を採用している。理由はカウンセリング対象者のトラウマ体験の時期と樹木画のトラウマ指標の樹高上の位置が一致するからにほかならない(大辻他, 2001)。しかし節穴のある木を1本描かせる教示法(Draw a knothole tree.)のようなBuck法の変法の場合、つまりトラウマ指標強制描画法の場合、トラウマ体験の時期とトラウマ指標の樹高上の位置に一致が見られないという指摘がある(田中, 2002)。これについては、投影樹木画法における教示法を巡る問題があるため、今後教示法の違いによるトラウマ指標の出現に関するリサーチや詳細な事例の比較研究が必要であろう。

今後の課題

投影樹木画法には、本研究のTCLに記載の

トラウマ指標である「実」を巡って、教示法に関する根本的な問題がある。つまり、「木を一本描かせる」Buck法(Draw a tree.)と「実のなる木を一本描かせる」Koch法“Zeichne einen Obstbaum.”(Koch, 1949), “Draw a fruit tree.”(Koch, 1952)のいずれを採用するかによって情動仮説の構築に違いが生じること(大辻他, 2000)。またTCLの適用において発達段階に応じた特質が予測されること(大辻他, 2000)。さらにトラウマ体験の意識化過程と節穴の治療的変容過程の関係(大辻他, 2001)など、今後の研究にまたねばならない課題が多くある。

文 献

- Buck, J. N. (1958) The Case of R : Before Therapy And After Therapy., The Clinical Application of Projective Drawings edited by Hammer, E. F Springfield, IL : Charles C. Thomas
- Cantlay, L. (1996) Detecting Child Abuse ; Recognizing Children at Risk through Drawings. Holly Press, Santa Barbara, CA
- Hammer, E. F. (1997) Advances in Projective Drawing Interpretation. Charles C Thomas Publisher, Springfield, IL
- 林勝造 (1994) 「バウムテスト」論考 臨床描画研究IX 金剛出版
- Jolles, I. A. (1971) A Catalogue for the Qualitative Interpretation of the H-T-P. Los Angeles : Western Psychological Services.
- Koch, C. (1952) The Tree Test: The Tree Test as an Aid in Psychodiagnosis. (林勝造, 国吉政一, 一谷 彊 訳 (1970) バウムテスト—樹木画法による人格診断法— 日本文化科学社 東京)
- Koch, K. (1949) DER BAUM-TEST : DER BAUM-ZEICHENVERSUCH ALS PSYCHODIAGNOSTISCHES HILFSMITTEL, ERSTE AUFLAGE, BERN : HANS HUBER.
- Ogdon, D. (1977) Psychodiagnostics and Personality Assessment : A Handbook. Los Angeles : Western Psychological Services.
- Oster, G. D. & Montgomery, S. S. (1996) Clinical Uses of Drawings. Northvale. NJ : Jason Aranson Inc.
- Oster, G. D. & Gould, P. (1987) Using Drawing in Assessment and Therapy : A GUIDE FOR MENTAL HEALTH PROFESSIONALS. New York : Brunner Mazel Inc.
- 大辻隆夫 (1999) 樹木画 京都女子大学家政学部 児童学研究第29号
- 大辻隆夫 (2001) 描画分析技法 京都女子大学家政学部 児童学研究第31号
- 大辻隆夫, 村井佳比子, 松葉健太郎 (2000) 投影樹木画法における青年期不適応指標の検討. 日本精神衛生学会第16回大会抄録集
- 大辻隆夫, 塩川真理, 田中野枝 (2000) 投影樹木画法における実の描画に関する教示法の違いについて. 日本精神衛生学会第16回大会抄録集
- 大辻隆夫, 内海有弘 (2001) 投影樹木画法における節穴 (knothole) の治療的変容過程. 日本精神衛生学会第17回大会抄録集
- 田中野枝 (2002) 投影樹木画法におけるトラウマ指標に関する一研究. 奈良女子大学大学院人間文化研究科人間行動科学専攻修士論文
- Wohl, E. & Kaufman, B. (1985) Silent Screams and Hidden Cries. Brunner Mazel NY

謝 辞

本研究をまとめるにあたって、中央に偏りのある樹木画事例に関する貴重な臨床資料をご提供くださいました、大阪府教育委員会スクールカウンセリング・スーパーバイザーで臨床心理士の加藤征宏氏に感謝致します。

付記：本研究は、平成13年度京都女子大学教育研究機器備品助成によるものであり、ここに記して深謝致します。